

二〇二五年一月一日

柿の店ひらく農家の門先に
錦繡やヘアピンカーブ曲がるたび
音もなく末広なせる鴨の水尾
柿花火旧家の庭を明るうす

あひる

康子

わたる

澄子

二〇二五年一月三日

木犀の香に一服す庭仕事
旅日記ひらく文机柿ひとつ
秋灯雨にしみしカフェの窓
雲間より天の梯子や枯野原
由緒寺訪へば爽やか花手水

せいじ

なつき

むべ

澄子

たか子

二〇二五年一月三日

大楠を揺らして神のお立ちかな
天高く音響けども機影見ず

澄子

明日香

二〇二五年一月二十九日

果舗茶舗をめぐる城下の秋の旅

千鶴

二〇二五年一月二十八日

秋澄むや杖の向くまま里山路
庭畑に細き畝足し葱植うる

きよえ

なつき

二〇二五年一月二十七日

栗剥きつ摘み食ひせる厨かな

もところ

二〇二五年一月二十六日

片時雨楡の大樹に宿りけり

澄子

毎日句会みのる選・二〇二五年一月三日